# ＩＳ　～インフィニットストラトス～　ORIGINAL GENERATION

牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ　～インフィニットストラトス～　ＯＲＩＧＩＮＡＬ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ

【Ｎコード】

Ｎ０９３４Ｚ

【作者名】

牙

【あらすじ】

作者の大好きな、ＩＳとスパロボＯＧのクロスオーバー作品。舞台はＩＳ世界のほうです。

## プロローグ（前書き）

駄文、物語薄いという駄目小説になりそうな妄想全開小説ですが、暇つぶし程度に読んでいただけたら幸いです。

ちなみに、作者はそこまで深く原作を知ってる訳ではないので、原作の面影が無い部分があっても、多少は許してやってください。

指摘してもらえれば、直す努力はします。

# プロローグ

ＩＳ　「インフィニットストラトス」。
既存の兵器、パワードスーツの常識を超えた性能を有するマルチフォーム・スーツ。
それが世間に発表された当時は、スペックこそ高く評価されたものの、開発者が無名で、余りに若すぎる女性ということに加え、女性にしか扱えないという奇妙な欠点から、最初は相手にされず、絵空事で終わっていた。

しかし、ＩＳの評価は、発表から一ヵ月後に起きた事件により、一変することになる。

「白騎士事件」。
日本を射程内に治める世界各国のミサイル基地全てが一斉にハッキングされ、実に二三四一発ものミサイルが日本に向けて発射されたのである。
世界中の誰もがこの大破壊術を防ぐ手段など持たず、恐怖でパニックに陥っていた日本の危機を救ったのは、純白のＩＳに身を包んだ、一人の女性。
後に、白騎士と称されるようになったそのＩＳは、ミサイルの約半数をその手の大剣で切り落とし、逃がした残り半数のミサイルは、開発途中であった荷電粒子砲を召喚し、薙ぎ払ったのである。
その強烈なインパクトは、発表されたＩＳの性能が本物であることを証明し、世界はＩＳを中心としたミリタリーバランスが構築された。

さらに、この大発明、ＩＳの性能をさらに上げるきっかけとなる

事件が、この白騎士事件の一年後に起こった。
南太平洋のマーケザス諸島沖に、奇妙な隕石が落下した。
宇宙探査用の観測機器や各国のレーダーの全てを掻い潜り、突如大気圏に突入したその隕石は、地表への落着寸前にブレーキを掛けたのである。
結果として被害が少なくなったためそれは良いのだが、明らかに自然のものと思えない挙動を行ったその隕石は「メテオ３」と称され、科学者達によって、研究された。

その調査で分かった事実は驚くべきであり、同時に、再び世界を危機に訪れるかもしれない結果となった。
メテオ３は、地球外知的生命体の手による一種の探査艦だったのである。
地球人類は未だ完全な外宇宙への進出を果たしたとはいえない状況だというのに、彼らは既に銀河系レベルの国家を形成しているということも判明した。
そして、各星系に対して積極的な武力進出を行っているということも。

この事実を受け、調査団の長である、ビアン・ゾルダーク博士は、当時の国連事務総長、現地球圏統一連合の初代大統領であるブライアン・ミッドクリッドに直訴。
種々の調査資料を基に「人類に逃げ場無し」と説き、地球外生命体、通称、「エアロゲイター」に対する矛となる計画、プロジェクトＥＲ発動を承認させる。
国連主要各国の協力も秘密裏に取り付けたビアン博士は、彼自身が所長を務めるアメリカのテスラ・ライヒ研究所と、パワードスーツメーカーとして名を馳せたマオ・インダストリーとイスルギ重工との協力体制の下、
メテオ３の解析技術を盛り込んだ新機軸の戦闘用パワードスーツの

開発に着手する。

そうして開発されたのが、第二世代型ＩＳと、戦闘用母艦・スペースノア級と外宇宙探査船を改修・大型化したヒリュウ改。

これらの戦力を整え、ビアン博士率いる機密舞台、「ディバインクルセイダーズ」、通称、ＤＣは、何れ来るエアロゲイターとの戦いに備えたのである。

## プロローグ（後書き）

はてさて、どうなることやら。
執筆が遅いので、一話を投稿するのは結構後になりそうです。

## 第一話　入学、ＩＳ学園！（前書き）

えっと、少し謝らなければいけないことが出来ました。
前回のあとがきにて、次回は長くなりそうだから更新が遅れそうだと言ったのですが、７割がた完成した後「まさかのデータ消失」。
これは驚きました。そして同時に、軽く泣きました。
申し訳ありませんが、書く気が少し失せたので、短いですが、早めの更新をします。
次回こそはＯＧキャラに活躍を……

# 第一話　入学、ＩＳ学園！

ＩＳ学園。

世界の常識を変えたマルチフォーム・スーツ。ＩＳ……その操縦者を育成する、世界唯一の、ＩＳ専門養成機関である。

女性しか居ないはずのＩＳ学園の教室。しかし、どんな世界の、どんなものにでも例外というのは存在する。

（これは……想像以上にキツイ……）

教室中央の最前列の席で、脂汗を流しながら独りごちる少年。名を、織斑一夏。

何の因果か、秋の統一模試を受けに行ったはずがＩＳ学園の先行試験会場に迷い込んでしまい、そこでＩＳを操縦出来る事が発覚。

その後一時的に日本政府の保護下に入り、そのまま半強制的にＩＳ学園に入学させられる羽目になったのだ。

しかし、政府の保護下というのは、ある意味では一夏にとってもありがたいことでもあった。というのも、一夏には両親が居ないので、政府が学園で生活する上での、主にお金面での不安を解消してくれる、という事実にもつながるからなのだ。

一夏はこの事実を、自分をここまで育ててくれた姉に迷惑をかけないですむ、という点でありがたいとは思っている。しかし、やはりこの状況は予想できなかったらしい。

しかし、この状況も考えても見れば当然である。

乙女の園に数少ない同年代の男性、しかも憧れのお姉様たる戦乙女の実弟なのだ。注目を集めない方がおかしい。

あまりの居心地の悪さに、窓際の席に座る幼馴染へと助けを求める視線を向けてみたが、すぐに視線をそらされる。

（それが6年ぶりに再会した幼馴染に対する態度かよ……いや、もしかして、俺嫌われてるのか？）

一夏はそのまま顔をそらした自身の幼馴染、篠ノ之箒をしばらく見つめながら自身の思考をめぐらすが、やがてそれが無駄な努力と分かると、今度は「二人目の例外」となる人物へ視線をよせる。

二人目の例外。要するに、一夏以外の男性でのＩＳ操縦者、ということだ。

その男の容姿は整っており、髪の先端に金メッシュを施している。

彼もまた、女子達の視線を集めているが、頬杖をついてため息を吐くだけで、面倒くさいとしかとらえていないといった感じだ。

一夏はもう一度視線を箒に戻す。しかし、これといった変化もないので、一度ため息を吐いた後、黒板のほうを向いた。

すると、ガラガラと音を立てて、教室左横にあるドアが開く。

入ってきたのは、やや小さめの身長に、緑色の髪、眼鏡をかけた女性。この時間で入ってくるということは、恐らく先生、というよりも、担任なのかもしれない。

その女性は教壇の前に立つとにっこり微笑み、自己紹介を始めた。

「皆さん、入学おめでとうございます。私はこの、ＩＳ学園一年一組副担任、山田真耶です。これから一年間、よろしくお願いしますね！」

「……」

しかし、教室の中は変な緊張感に溢れていて、返事は帰ってこない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

うろたえる山田先生が可愛そうなので、一夏は自分だけでも反応

するべきかと考える。しかし、ここでスベったら、ただ一人を除いて全員女子のこの教室で、変なキャラクターを作られてしまう。
そこまで考えると、一夏は耳元で自分を呼ぶ声に気づいた。

「織斑君！　織斑君！」
「はっ、はいっ！！」

必死になって自分の名を呼ぶ山田先生に、思わず大声で生返事をする一夏。
ガタリと椅子から立ち上がると、クラス中からクスクスと笑いが起こる。

「お、大声出してごめんね。でも、あ、から始まって、今、おなんだよね～。だから、自己紹介してくれないかな？　駄目かな？」
「い、いや、そんなに謝らなくても……っていうか、自己紹介しますから、落ち着いてください」
「ほ、本当ですか？　じゃあ早速お願いしますね」

そこまで会話が続くと、一夏は立ち上がったまま後ろを向く。女子達の視線が痛い。なんせ、先ほどまで視線をそらしていた箒でさえ、横目で一夏を見ているのだから。

しかし、ここまで注目されては自己紹介しないわけにもいかず、一夏はさっさと喋り始めた。

「え、えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏はぺこりと頭をさげ、上げる。しかし、女子達の「もっと何かないの？」といった視線に耐えられなかったのか、自然とたじろぐ一夏。

（そんなに喋ることはないが、確かにこれしか喋らないと、無趣味、暗いやつのレッテルをはられてしまう……こうなったら！」

静かに一夏の頬を伝う汗。息を大きく吸っては吐く一夏を見て、自然とそこにいる者達は息を呑んでその様子を見守っていた。

そして、覚悟を決めたのか、先ほどまで閉じていた瞳を開く。そして再び大きく息を吸った一夏は……

「以上です！！」

見事にスベった。緊迫した空気は一気に緩み、思いっきりこける女子多数。

（あれ？　俺、何かミスった？）

いやさ、確かに今のは不意打ちだったかもしれないけど、そこまで期待すんなよ。

一夏は思いっきりそう思ったが、次の瞬間、そんな考えも一気に吹き飛んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――ガンッ！

「痛ッ――――――――！？」

一夏の脳天真上に直撃する拳。あまりの痛みに、一夏は声をあげて、おそるおそる拳のほうを見た。

そこに居たのは、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身など……要するに、そこにいたのは、

「げえっ！　関羽！？」
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

――――――――――――――――――――――――――――パァンッ！
本日二度目の殴打、頂きました。ちなみに、とてつもないダメージだ。
その大きな音に、何人かの女子の顔がひきつるほど。
ちなみに、もう一人の男子のほうは、興味深そうに一夏のやりとりを見ていた。

（それにしても、このトーン低めの声に、この叩き方は……まさか）
「あ、織斑先生。会議はもう終わったんですか？」
「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けて悪かったな」
「いえ、副担任ですから、これくらいは……」

先ほどの一夏への言葉とは打って変わった優しい声。
しかし、これで確信した。この人は――――――――――

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私のいうことは聞け、いいな」

なんという暴力発言。しかし、これで一夏の確信は、これで証明された。
――――――――――――織斑千冬。俺、織斑一夏の実の姉にして、育ての親。
なんて格好つけた思考を巡らせる一夏だったが、そんな考えさえも、次の女子達の咆哮で掻き消されることになる。

「キャーーーーーーーーーーーッ！　千冬様、本物の千冬様よっ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉さまにあこがれてこの学園に来たんです！　北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉さまのためなら死ねます！」

次々に騒ぎ出す女子達。対する千冬姉はうっとおしそうな顔で
「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。私のクラスにだけ集中させているのか？」
と、小さく呟く。
これが心の底から言ったことだから、ここまでクラスはもりあがるのだ。千冬のちょっとした呟きで、クラスはさらに盛り上がった。

少しして落ち着いたクラスを確認すると、千冬姉は再び言葉を発した。

「さてと、邪魔してしまったが、自己紹介を続けてくれ」

そうして、また次々と自己紹介が始まる。しかし、俺の関心を引くのは、もう一人の男子の言葉だけだった。

「南部、響介だ。少し前までアメリカ軍に居た……これから一年、よろしく頼む」

その口どりは、本物の軍人のもの。それに、制服の合間合間に見える腕からも、鍛え上げられた筋肉が見え、その威風堂々たる姿に、ざわめきを見せていた女子達も、自然と静かになっていた。

◇

「駄目だ……全然ついていけねぇ……完全にギブだ……」

現時刻は、一時間目のＩＳ理論終了後の、休み時間。
オレこと織斑一夏は、授業内容にまったくついていけず、机につっぷくして一人うなだれていた。
しかし、オレとあの、南部って奴以外全員女子というのは、ここまで辛いものなのか。この世界的大ニュースは当然色んなところへ出回っているらしく、視線や噂話ばかり感じる……。
しかも、嫌なのは誰も話しかけず、ひそひそ話してるだけってことなんだよな。フレンドリーに話しかけてきたりする人ならまだ分かる。でも、流石に「あなた話しかけなさいよ」「私行っちゃおうかな」とか、オレに聞こえるくらいの声量で話されたら、嫌でも視線が気になる。

「はぁ……なんとかならねぇかな」

そう、小さく呟いた時だった。
いきなりクラスのざわめきが強まった……というより、話し声が大きくなったのだろうか。一気にあたりの女子達が騒ぎ出した。
オレだって人間。そうなったら気になってしまうのはしょうがないことで、机から体を起こして振り向く。
するとどうだろうか。百聞は一見にしかず、皆が騒ぎ出した理由がすぐに分かった。南部に、一人の女性が話しかけたのだ。
その女性は、綺麗な色の金髪を後ろに束ねており、腕を軽く組んでふふんと鼻で笑い、南部に声をかける。

「響介、なにぶすーっとしちゃってるのよ。唯一の友達と話したいとか思わないわけぇ？」
「知るか、一人でやってろ。……それに、オレはこの視線に耐えられるほどタフじゃない」
「ええー？　むしろ、もっと見せ付けちゃえーってならないわけ？　響介ってば、今有名人なんだから」
「興味がないな。それに、オレがＩＳを動かしてここに入れられたことや、オレが有名人だということ事態、まだ実感が沸かん」
「あらら。いつも通りねぇ」

会話の内容から推測すると、二人はそれなりに話せる関係みたいだ。それに、あいつもオレみたいに、無理やり入れられたってことなのかな。可哀想に。

「……ちょっといいか」
「え？」

そうしてじっと後ろを眺めていると、いきなり誰かに話しかけられた。驚ろいたせいか生返事をしてしまい、軽く動揺しながら、オレは振り向く。

「……箒？」

そう、オレに話しかけてきたのは、六年ぶりに再会した幼馴染、篠ノ之箒だった。

## 第一話　入学、ＩＳ学園！（後書き）

前書きで言いたい事全部言ったので、次回の予定、その他を書いておきます。

まず、次回の更新日。今週中にあげる予定です。

無理だったら来週の月くらいに。

それと、すごく大切なこと。自分の原作知識です。

ＩＳ原作は、１、２、６巻だけという、見事な穴空きです。アニメは全部見てます。

ＯＧは、アニメ全て、ＧＢＡ版ＯＧ１、ＯＧ２はやってますが、２，５は未プレイです。ある程度の知識はありますが。

まあようするに、原作もあまり詳しくないですよ、ということです。

それではここまで読んでくださった方々、ありがとうございました！

## 第二話　二人目の例外（前書き）

今回はちょっとハイペースです。ＯＧキャラを早く出したいということもあり、台詞多めで物語を進行させていきます。

手抜いてるだけだろ？　ってのは禁句でｗ

後、感想で「誰々は出さないの？」とか遠慮なく言ってください。キャラを忘れちゃうと困るので。

というより、この世界でＳＲＸをどうするかまだ考案中なので、もう少し先にはなりそうですが。

## 第二話　二人目の例外

目の前に居たのは、６年ぶりに再会を果たした幼馴染、篠ノ之箒だった。

箒は、オレが昔、というか小学生の時に通っていた剣道場の子。肩下まで伸びる黒髪ポニーテールと、本人曰く「生まれつき」の少し不機嫌そうな目つきが特徴的だ。

いや、単にオレが嫌われてるだけってのも有り得るな。実際、今箒を名前で呼んだら睨まれたのは、気のせいじゃないはず。

「廊下でいいか？」

ここでは話にくい事なのか。はたまた、他の人には聞かれたくない話なのか。まあオレとしてはどちらでもいいんだが、この状況から抜け出せるのは非常に助かる。

「早くしろ」

「お、おう。悪いな」

箒はオレが何か返事をする前にすたすたと廊下へ出て行ってしまう。同じように、椅子から立ち上がったオレも箒についていくのだが……そこに集まっていた女子達がざあっと道を開ける光景が、何か凄かった。

それで廊下に出るは出たんだが、周囲を囲む女子が散開することはせずに、オレ達を囲んで聞き耳をたてている。これじゃあ廊下と変わらないじゃないか。

「あ、そういえば」

「何だ？」

ふと思い出したことがあって、自分から話題を振る。というのも、廊下に呼んでおいて箒が自分から喋ろうとしないからなんだけど。

「去年、剣道の全国大会優勝したってな。おめでとう」

そう褒めてやると、箒は口をへの字にして顔を赤らめた。いやいや、怒らないでくれよ。

褒めただけなのに怒られて、全国優勝レベルの太刀を食らうなんてごめんだ。

「……なんでそんなこと知ってるんだ」

「新聞で見たから」

「何で新聞なんて見てるんだっ……」

何を言ってるんだ、箒は。あ、もしかして、オレには知られたくなかったのかな？

もしそうだとしても、オレが自由に新聞を読む権利くらいは認めてほしいけど。

それにしても箒は変わってないな。見た目から、ちょっと男というか、侍っぽい喋り方まで、全部。

知ってるか？　懐かしむ心って、意外と大事なんだぜ。

「あー、後」

「な、何だ？」

「……久しぶり。六年ぶりだったけど、箒ってすぐに分かったぞ」

「え……」

「ほら、髪型も同じだし」

そういってやると、箒はまた顔を赤らめて、指先で自分のポニーテールを弄りだした。

「よ、よくも覚えているものだな……」

「そりゃ覚えてるだろ、幼馴染のことくらい」

オレがそこまで言うと、タイミングがいいのか悪いのか、二時間目開始のチャイムが鳴り響いた。

それと同時に、オレ達を囲んでいた女子達も自然と教室へ戻っていく。この切り替えの速さは、流石にエリート校ってことなのかな。

「オレ達も戻ろうぜ」

「わ、分かっている」

ぷいっとオレから顔をそらしてそう答える箒。あれ？　オレ、何か悪いこと言ったかな？

そうして、またすぐに教室へ歩き出す箒。オレを待ってはくれないのか。

さてと、オレの後ろに立つ千冬姉のオーラが怖いから、オレも早く席につこうかな。

◇

やばい。本日二度目のギブアップだ。

現時刻は二時間目開始から２０分ほど後。オレはまたしても心の中でギブアップを宣言し、机につっぷくしていた。

黒板の前には、教科書に書かれていることをすらすら読み上げる山田先生。その山田先生の授業に、時に頷きながらノートをとって

いく女子達。そして、反対にまったくついていけずに困り果てるオレ。

しかし……これはマズイな。普通の授業ならそこそこついていける自信はあったのだが、ＩＳの勉強はまったくしたことがなかったオレだ。机につまれた教科書をめくってみるも、オレには意味不明の単語にしか見えない。

そうだな、例えるなら、アメリカ人がいきなりイギリス英語で書かれた本を読み始めた感じだな。うん、自分でも考えてることがまったく分からない。

それにしても、ＩＳ学園に入る人は事前学習してるって本当なんだな、と、改めて痛感した。入学当時は「大丈夫か？　この学校」なんて思ったりしたが、こうしてみると立派なエリート校だ、ホント。

（エリートには興味ないが、これは要勉強だな。千冬姉にこれ以上怒られたくもないし）

頭の中で変な覚悟を決めると、山田先生がこちらを見ていた。もしかして、オレの状況を察して助けようとしてくれてるのかな。

「織斑君、分からないところはありますか？」

「え、えっと……」

もう一度。もう一度だけ、手元の教科書に視線を落とし、次は黒板を見る。うん、全部分からん。

「分からないところがあったら聞いてくださいね。何せ、私は先生ですから！」

小さい子供が意地をはるかの如く、山田先生は胸を張る。

やっぱり、人は見た目で判断しちゃいけないな。さっきも教科書をスラスラ読んでたし、普通に頼れる先生なのかもしれない。

「先生！」

「はい、織斑君！」

この気合の篭った名指し。やっぱり、この人は頼れる。オレは勝手にそう確信し、自分の気持ちというか、状況をストレートに伝えた。

「ほとんど全部分かりません」

「え……ぜ、全部、ですか？」

あれ？　自分の気持ちを素直に言ったほうが受け入れられると思ったのに。

山田先生はいかにも「困ります」といった表情でうろたえている。

「え、えっと、今の段階で、織斑君以外に分からないところがある人は居ますか？」

シーン。そんあ擬音が聞こえそうなほどに、教室は静まり返っている。

どうした皆！　聞くは一時の恥じ、聞かぬは一生の恥だぞ！　ここで聞いておくべきなんだ！

「……織斑。入学前に渡した参考書は読んだか？」

教室の端からこのやり取りを見ていた千冬姉がオレに疑問をぶつける。もしかして、助けてくれるんだろうか。さすがはオレの姉！

ここは正直に答えよう。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

――――――――――――――――パァンッ！

本日三度目の殴打。普通の出席簿で叩かれてるだけなのに、何故ここまで痛いのだろうか。

「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者。後で再発行してやるから、一週間以内に覚えろ、いいな？」

「……はい。分かりました」

あの分厚さを一週間はむちゃくちゃな気がするけど、千冬姉の目つきが怖いから素直に従う。

その目つきは反則だぞ、千冬姉。悪魔ですら払いのける威力だ、うん。

◇

「ちょっとよろしくて？」

「へ？」

二時間目も無事にとは言えないが終わり、現在は休み時間。さっさと復習して少しでも授業についていこうと考えていたオレはいきなり声をかけられ、素っ頓狂な声を出した。

話しかけてきた相手は、綺麗な金髪に、鮮やかなブルーの瞳を持つ女子。いや、女子なのは当たり前か。

髪の先端がちょっとロール状になってるところに、何気ない気品を感じる。どこかの貴族なのか？

それにしても、その雰囲気は、最近の女子を象徴した感じだよな。

ＩＳのせいで「女＝偉い」の構図が出来上がってしまってる。

「訊いてます？　お返事は？」

「あ、ああ。悪い。それで、どんな用件だ？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも幸運なのですから、それ相応の態度というものが……」

なんだ、返事は？　って聞いてきたから返事しただけなのに、ぐちぐち語り始めた。

正直、オレはこんな人間は苦手だ。ＩＳを与えられて、ちょっと女性が優遇され始めたからって、調子に乗ってその力を振りかざす。そんなものはただの暴力だ。学校でよくある苛めとかと、なんら変わらない。

「悪いな。オレ、君が誰だか知らないし」

実際、知らないのは事実だし。

自己紹介で今みたいにぐちぐち語ってたから印象には残っているものの、恭介の存在や、千冬姉が担任だったことのが全然ショックは大きかった。

しかし、この答え方はどうも目の前のこの女子の気に障ったようで……面倒な女子に絡まれちゃったな、はあ。

「わたくしを知らない？　このイギリス代表候補生、セシリア・オルコットを？　入試主席のこのわたくしを？」

名前、セシリアっていうのか。それにしても代表候補生か……それは凄いな。まあ、代表候補生が凄いっていうのも、今復習を始めたこの教科書のページに書いてあって、今覚えただけなんだけど。

「へえ。そいつは凄いな。それと聞きたいことがあるんだがいいか？」
「ふん、下々の者の要求にこたえるのも貴族の務めですから、構いませんわよ」
「じゃあ聞くけど、入試ってあれだろ？　ＩＳ動かして戦うやつ」
「それ以外に入試などありませんわ」
「あれで得点一位って、どういうことだ？　倒すだけならオレでも出来たし」
「な……」

あれ？　オレ、何か変なこと言ったか？
セシリアはオレの言葉に顔を引きつらせてる。もしかして、見返せたかな？
まあ倒したといっても、あれを倒したと言っていいのか疑問だけど。突っ込んできた教官を避けたら、そのまま壁にぶつかって教官が動かなくなっただけ。
しかし、オレの言葉に相当ショックを受けたのか、セシリアは顔をひきつらせたまま、オレに尋ねてきた。

「わ、わたくしと、後もう一人の女子だけと聞きましたが？」
「女子では、ってオチじゃないのか？　あっちにいる南部も倒したみたいだし、それに、二人居るならその時点で主席とも言えないと思うんだが」

オレは正論を述べただけ。悪くない、はず。
しかし、セシリアはどうも分かりにくいやつだ。本気で怒っているのか、こちらに人差し指を立てて、大声で聞いてきた。

「あなた！　あちらの殿方はともかく、あなたも教官を倒したというの！？」

「いや、あっちはともかくって……」
「あちらの方は普通に授業についてきていますわ！」
「お、落ち着けって。な？」
「これが落ち着いて――――――」

ベストタイミング。ここで休み時間終了のチャイムが鳴った。今のおれには福音に聞こえるね。

「くっ……話の続きはまた後ほど！」

最後に、フンッ、とオレを軽蔑したかのような声を出し、自分の席へと戻っていくセシリア。いやあ、本当に助かった。
そして全員が席につくと、千冬姉が教壇の前に立った。次の授業は千冬姉が担当なのかな？

「それではまず授業の前に、クラス代表を決めておく。まあ、学級代表のようなものだな。主な仕事はクラス対抗戦への参加と、生徒会への出席だ。ちなみにクラス代表は恐らく決まってしまうと一年間変更できない。推薦、又は立候補する者は居ないか」

ざわざわとクラスが色めきだつ。まあ、オレには関係ないだろうな。

「私は織斑君を推薦します！」
「お、オレェ！？」

ちょっと待ってくれ。いくらオレが珍しいからって、クラス代表までやらせるのは間違ってると思うぞ、うん。

「はぁい、織斑センセ。私は響介を推薦します」

一時間目の間での休み時間で恭介と話していた金髪の女子が手をあげ、軽い口調で恭介を推薦する。やっぱり知り合いなんだろうか。
そして、肝心の響介は目を閉じて、頬杖をついて沈黙――――――肝が据わってるな、うん。

「では、候補者は織斑と南部……他には居ないか？　居ないなら、この二人のどちらかにするぞ」
「納得が行きませんわ！！」

千冬姉の言葉に、机を思いっきり叩いて立ち上がったのは、先ほどまでオレに色々言ってきてたセシリアだった。もしかして変わってくれるのかな。もしそうだったら有り難い。人とは仲良くしておくものだな。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表なんて、いい恥じさらしですわ。このセシリア・オルコットに、そのような屈辱を一年間味わえと！？」

そうだ、もっといったれセシリア！　……あれ、これって普通にけなされてるだけだよな？

「いいですか！？　クラス代表とは、実力トップがなるべき。そしてそれは、この私ですわ！！」

なんだ、普通にけなしてるだけじゃん。そうまでしてクラス代表になるたいなら勝手になればいいとオレは思うが、男だからだとか、そういうのは気に入らない。流石に言い返したくなってくる。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自

体、このわたくしには耐え難い苦痛で……」

うん、もう我慢できないな。

「イギリスだってたいしたお国自慢はないだろ。世界一マズイ料理で、何年覇者だよ」

「なっ……！？　あ、あなたねぇ、わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのはお前だ。それくらい理解してから物を言え」

……ん？

ここにきてオレの変わりに事を言い出したのは、先ほどまで黙っていた響介。なんていうか、色んな意味で強そうだな。

「……ッ！　決闘ですわ！！」

唇をかみ締め、再び机を叩いて宣言するセシリア。こらこら、物は大切にしなさい。

しかし、先ほどまでのオレへの怒りはどこへいったのか、それとも先の言葉でそのまま持っていかれたのか、今のセシリアの怒りの矛先は、どうやら響介に向いてるようだった。

「いいだろう。代表候補生にオレが勝てるかどうかは怪しいところだが、分の悪い賭けは嫌いじゃない」

……これは凄い。同姓のオレですら格好良くて見ほれるほどだ。でも、オレは決してホモじゃあない。

「さて、話はまとまったな。では一週間後の月曜日、放課後、第３アリーナで勝負を許可する。各自、準備しておくように。それでは

授業に移るぞ」

こうして、響介とセシリアのクラス代表決定権を賭けた戦いが始まることになった。

## 第二話　二人目の例外（後書き）

今回もＩＳ成分が高いですね。キョウスケにスポットライトを当ててはいますが。

ではでは、ここまで読んでくださった方々ありがとうございました！

## 第三話　響介との接触（前書き）

今回はキョウスケの出番が多いです。キョウスケの格好よさとか、上手く表現出来ない……キャラ崩壊してないですかね？

## 第三話　響介との接触

響介とセシリアの決闘が決まった後、何事も無かったかのように授業は進んだ。

千冬姉もあれ以上事には触れなかったし、セシリアも落ち着いたのか、オレ達に声をかけることも無かった。

そんな調子で、今は同日の昼飯時なのだが……なんと素晴らしいことか。ＩＳ学園は全寮制だから当たり前なのかもしれないけど、食堂があって、しかもその料理が滅茶苦茶上手い。

ちなみに、オレのメニューは日替わり定食。今日はサンマの塩焼きとご飯に味噌汁。和の象徴だな。

「……」

でも、この空気だけはなんとかしてほしいと思う。

オレの隣では、箒がオレと同じく日替わり定食を食べているのだが、何があったのかまったく口を開かない。

黙々と食事を食べ続けること約５分ほど。状況に変化が訪れた。

「あ、織斑君、ここに居たんですね」

「はい？」

突然名前を呼ばれたので振り向いてみると、山田先生が書類を片手に持って立っていた。

「えっとですね、織斑君の寮の部屋が決まりました」

そう言って鍵と何かが書かれた紙を差し出してくる山田先生。渡された紙を見てみると、部屋番号が書かれているようだ。「１０２

５室」とだけ書かれている。
それにしても、何かこう、寮生活って何かワクワクするものがあるよな。友達とどっかに泊まるとか、すっげぇ楽しみじゃん。まあＩＳ学園には女しか居ないからちょっとアレだけど。
ちなみに、ＩＳ学園が全寮制なのは、将来有望なＩＳ操縦者を保護するのが目的らしい。まあ、現存する兵器の中でも最強なＩＳと、それを操縦する人間が居たら、政府とかも保護したくなるだろうし、当然っちゃ当然か。
何せ、ＩＳは今のところ全世界で４６７機しかないんだからな。各国に割り振られたコアを研究するしかないらしい。

「俺の部屋、決まってないんじゃなかったんですか？　聞いた話じゃ、一週間は自宅から通学することになってたみたいですけど」
「そうなんですけど、事情も事情なので、急遽部屋割りを変更することになったんです。……織斑君、そのあたりは政府から聞いてますか？」

最後のほうは俺にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。
実際そんな事は聞いてないけど、当たり前かとは思う。だってアレだぜ？　俺って一応、「世界でたった二人の男性ＩＳ操縦者」な訳で、ニュースとかでも報道されて相当有名になったんだし。
有名人が歩いてたら声をかけたくなるのは普通だと思うけど、これは街中を歩く有名人の気持ちが本当に良く分かる。しかも俺の場合は自宅まで押しかけてくる研究者も居るんだ。寮のほうが正直有り難いな。

「まあそういうわけで、政府特命もあって、寮に入れるのを優先したみたいです。相部屋ですが、一ヶ月もすれば個別の部屋に移動できるので、それまで我慢してくださいね」
「それは分かりましたけど……荷物のこともあるんで、一回帰って

いいですかね？」
「あ、それなら――――――」
「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」
いつから話を聞いていたのか、千冬姉が乱入してくる。まあ、確かに有り難いし、タイミングも結構いいんだけど。
「ど、どうも有難うございます」
「まあ、生活必需品だけだがな。お前の場合、着替えと携帯の充電器だけで十分だろう」
いや、実際そうだけど、すっごい大雑把だな。凄い強くて人気なイメージがある千冬姉だけど、実際に家事はほとんど出来ないから、こんなものなのかもな。
「じゃあ、時間を見て適当に部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時くらいにまたここでとってください。後、部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。ですが、今のところ、織斑君と南部君は使えません」
「え、なんでですか？」
いや、大浴場使えないのは割と本気で困る。オレは風呂が大好きなんだ。
「アホかお前は。同年代の女子と一緒に入りたいのか？」
「あー……そうだった」
千冬姉の突っ込みで思い出す。そうだな、ここは恭介を除いて、女子しか居ないんだもんな。

「おっ、織斑君、女子と一緒に入りたいんですか！？　駄目ですよ、そんなの」
「いえ、入りたくないです」
入ったら最後。どうなるか分からないし、論理的にそれは駄目だろ。
しかし、俺の言葉をどう受け取ったのか、山田先生は顔を赤らめてきゃあきゃあ騒ぎ出す。
「ええっ、織斑君、女の子に興味がないんですか！？　それはそれで問題のような……」
駄目だこいつ、早くなんとかしないと……。
多分本人も頭の中では分かってると思う。でも、これが中々わざとに見えないから……やっぱり素なのか？　それだったらこの先生、結構問題だぞ。
だって、この発言のせいで、廊下ではすでに「婦女子談義」が開始されてるんだもの。
「織斑君、男にしか興味がないのかしら……」
「それはそれで……いいわね」
「織斑君Ｘ南部君……ジュルリ」
頼むからこの状況をなんとかしてくれ。
◇
「えーっと、ここが１０２５室か」
俺はあの後、直ぐにその場を去って、今はこうして自室の前に居

た。
あの状況になったら逃げるしかないだろ？　誤解を解く方法があったら是非とも教えてほしいもんだ。
それにしても、山田先生、相部屋って言ってたっけ。まさか女子とじゃないだろうな……。
ゴクリ、と大きく唾を飲む。知らない女子と相部屋だったら寝不足も覚悟だ。
ドアに鍵を差し込む。あれ？　開いてる。
扉を押し開け、部屋に入る。
まず目に入ったのは、二つの大きなベット。そしてそこに横たわる響介の姿だった。
ほっと胸を撫で下ろして、ため息をつく。

（マジで知らない女子と一緒じゃなくて良かった……）

そこまで考えて、もう一度安堵のため息をつくと、恭介がこちらに声をかけてきた。

「お前は……織斑一夏といったか。まさか、お前が俺の同居人、ということなのか？」
「ああ、そうみたいだぜ……よろしく、南部さん」

俺は何故か大人びた雰囲気をただよわせる響介に、南部さんと返してしまう。すると、恭介はふっと笑みを漏らし、もう一度声をかけてきた。

「フッ、響介でいい。同室ということもあるが、オレ達は同じ穴のムジナだ。これからよろしく頼む」
「あ、ああ……こちらこそよろしく、恭介」

やっぱり、響介ってなんか、大人だよな。色んな意味で。いくら騒がれてもそこまで気にしてなかったし。
恐ろしいほど肝が据わってるっていうか、なんていうか。

「それで、響介。一つ聞きたいんだけどさ、なんでお前はこんなところに入れられたんだ？」
「その事か……本当にあれは驚いたな。いいだろう、説明してやる。
まず、オレは自己紹介の時に、以前はアメリカ軍に居たと言ったな。そこでも当然ＩＳの研究が進められていて、そこでは『ゲシュペンスト』という量産期の開発がされていてな。武装面が乏しかったことと、コストの面で没となったが、それを諦めきれずに、ある博士がゲシュペンストの改造機、『アルトアイゼン』を作り出した。
しかしその、『アルトアイゼン』の加速は凄まじく、Ｇに耐え切れず嘔吐を繰り返す者も居た。それで使いこなせる者がおらずにお蔵入りとなっていたのだが……偶然それをオレが動かし、丁度攻めてきた戦車共を一掃してしまってな。ここに入れられた」

響介の話は少し長かったが、大体流れは把握出来た。要するに、「誰にも使いこなせずに解体されかかったＩＳを使いこなせるものが居て、しかもそれが男子だったからさっさと特集してＩＳ学園に入れちまおう」って事。だと思う。

「そういうお前は何故ここへ入れられたんだ？」
「え、俺か？　俺はだな……」

俺は、初めてＩＳを動かした時の事を思い出す。確かあれは二月になったばかりの頃だったっけな。

「俺さ、高校受験で、藍越学園ってとこ受けたんだよ。それで、試験会場があまりに広くて迷っちゃってさ……それでたまたま開けた

部屋の中にＩＳがあって、触ったら動いちゃったから入れられた、って感じだな」
「それでこんな状況になったという訳か。お前も大変なのだな」
「ああ……でも、男一人じゃ厳しいし、お前が居ただけでも助かったよ、響介」
「フッ、それは同感だな」

短い会話。たったこれだけしかまだ響介とは喋っていないが、何か打ち解けてきた気がした。
だが、話を聞く限りでは、響介もそんなにＩＳに慣れてない気がしてくる。本当にセシリアに勝てるのだろうか。
それが心配で響介に尋ねてみると、響介はこう答えた。

「やるしかないなら、やるだけだ。分の悪い賭けは、嫌いじゃない」

## 第三話　響介との接触（後書き）

すいません、今回結構短いです。
キョウスケのキャラが崩壊してたら、どうかご指摘ください（汗）
最近スパロボやってないので、キョウスケの性格が曖昧です。

## 第四話　決闘終了（前書き）

更新が大幅に遅れてすいません。この小説のデータのほとんどが消えてました。

現在復興中ですが、先に書き上げた第四話を先にあげておきます。

それにしても、視点変えていいのかってのと三人称難しい、という問題が……。

## 第四話　決闘終了

響介の事情やら何やらを聞いてから数時間後。夜飯時となっていたので、俺は響介と箒を誘って食堂へ向かっていた。
ちなみに、道中で二人共自己紹介を終えてたりする。とはいえ、俺が箒に無理やりさせたから箒はふくれてるんだが。
まあ、二人共そこそこ仲良いからいいかな！

という訳で、食堂に着く。現在、時刻は６：３０……外国の人も多いけど、時差ボケとかしてないのかなぁ。
そんなどうでもいいことに思考をよせながらも、俺たちはさっさと食券を購入する。箒と俺が日替わりランチで、響介はアフリカの『パニ』という料理らしい。詳しくは知らんけど、軽めで栄養価が高いらしい。
食事を受け取ったら、さっさと空いてる席をとる。４人まで座れるテーブルだ。
そこで食事を取り始める訳なんだが……予期せぬお客が来たよ。予期せぬお客。

「はぁい、響介。ご一緒しない？　……あら、もう一人の男子のほうも居るのね。ハロー」
「は、はあ」
「……」

金髪の女性が話しかけてきた。この人って確か、休み時間に響介と話をしてた人で……確か、自己紹介でアメリカの代表候補生って言ってたっけ。今日の俺の記憶は冴えてるな。
で、その女性は響介に「エクセレン、自己紹介くらいはしろ」っ

て怒られて、互いに自己紹介した訳なんだが……エクセレンと話してると箒がすっごい怖い目でこっちを見てくる。なんでだろう？
そしたらそしたでエクセレンが箒に耳打ち。〜〜が好きなの？とか言ってたような気がするが良く聞こえん。それを聞いた箒は顔を真っ赤にしてそそくさと立ち去ってしまうし。
結論：エクセレンに関わると結構振り回されて疲れる。これだけだよ、もう。

「ところで一夏君、来週にあのセシリアちゃんと響介が対戦するけどさ、どう？　許可は貰ったから、その後に私と模擬戦しない？」
「え？　それってどういうことだ？」
「だって、響介は相手してくれないし、男でＩＳを使える貴方の実力も知りたいし、ね？」
「俺に何かを期待されても困るんだが……」

まあ、こうしてエクセレンと模擬戦をすることになってしまった。

後日、千冬姉に訓練機の使用を頼んだら、俺は特例だから専用ＩＳを渡すって言われた。対戦当日に届くらしい。
しかし、俺は完全ＩＳ初心者、相手は代表候補生。ハッキリ言って、何も出来ずに負ける可能性のほうが多い。なので箒と響介に何か教えてもらえないか頼んだところ、剣術を箒、授業の復習等を響介が一緒にしてくれることになった。時々エクセレンが乱入してくるが……多分、問題ない。

◇

そんなこんなで決闘当日。先に試合をする響介とセシリアはアリ

ーナに向かい、俺とエクセレンは千冬姉達教員と一緒にモニター室で試合を観戦することにした。
そこで、俺は最もな疑問をエクセレンにぶつける。
「なあ、エクセレン。響介、勝てると思うか？　相手は代表候補生だし」
「んー？　……まあ、今のセシリアちゃんは、相手を見下すっていうか、響介を甘く見てるから……その隙を逃がさない響介じゃないし、五分五分じゃないかしらん？
最も、セシリアちゃんが冷静だったら、それこそ響介が言うところの、分の悪い賭けになるんだけど」
「そうか……」

エクセレンの話を聞いて、ちょっと不安になる。響介には、是非勝ってもらいたい。
そうこう考えてると、セシリアと響介がアリーナの上空へ上がってきた。
セシリアの身を包む蒼いＩＳは、ブルー・ティアーズという中距離射撃型らしい。それ以上の情報は、一応国家レベルなので説明してくれた千冬姉にも分からないようだった。
対する響介は……普通見るＩＳとはまったく異質の、とても分厚い装甲を持った赤いＩＳだった。
頭部からは角のようなものが生え、右手にはいかつい銃みたいなのがある。両肩についてるタンクみたいなのも、実に重そうだ。『アルトアイゼン』というらしいそれは、どちらかと言うと、コンセプト上は戦車などに近そうな外見だった……。

◆

「最後のチャンスをあげますわ。今謝るというなら、痛めつけるレベルをさげてあげてもよろしくってよ？」
「知らんな。それに、そんなものはチャンスとは言わん。今はただ、目の前に立つ敵を打ち貫くのみだ」

アリーナの上空。セシリアと響介が地味な言い合いをしていた。
というより、響介からしたらそれは軽い挑発でもあった。相手が冷静を欠けば勝機があると考えたからだ。

『それでは二人共、試合を始めてください』

教員である誰かの声がアリーナに響く。試合開始の合図だ。
そして、それと同時に響介は突進――――――――――否、奇襲をかけた。その加速度は凄まじいものであり、一瞬で最高速度に達し……数百mあったセシリアとの距離を、瞬く間につめてしまった。

「ッ……！？」

その驚異的な速度に驚きをかくせないセシリア。しかし、冷静を欠いた訳ではない。
即座に後退し、響介からの奇襲を避けそうとするが、その加速力に、後退では無意味だと判断する。
そこからのセシリアの行動は早かった。なめらかな曲線を描きながら、自身の武装である、『スターライトｍｋ？』を展開し、響介へと銃口を向け、撃つ。発射されたエネルギー弾は、正確に標的である響介へと襲い掛かっていた。
それを確認した響介は空中でその加速を一気に止め、また別の方向へ加速して避ける。
そして、そのやり取りを何度か繰り返す。接近が難しいと判断し

たのか、響介は左手の先についた銃口をセシリアに向けた。
「射撃は苦手なんだがな……四の五の言ってられんか」
そこから発射されたのは、『3連マシンキャノン』と呼ばれる、実弾だった。
それを数発発射し、響介は再びセシリアに向かって加速する。3連マシンキャノンが自身の体を上手く隠しているので、スターライトmk?も標準が定まらなくなり、セシリアはそれに苛立ちを覚えた。
そして、ついにセシリアと響介の距離は数十mを切る。後もう一歩踏み込めば届く、という距離なのだが……
「フフッ、残念でしたわね。観察力がまだ甘いのではなくて?」
「何……? ッ!?」
直後、背後からの強い衝撃が響介を襲った。
瞬時に振り向くと、そこには数機の青いビットが舞っていて、そこから射撃されたのか、内一機のビットから煙が出ている。
(仕方ない……まずはあれを潰すか)
そのビットが余程邪魔に感じたのか。響介は一気にビットへ加速した。
響介を後退させるべく、再びビットからビームが放たれる。しかし、響介はそれを避けようとはせずに、わざと食らっていった。
「なっ……馬鹿ですの!?」
さすがのセシリアもそれは予想外だったのか、声を張り上げる。

しかし、即座にハイパーセンサーが危険信号を出した為、セシリアが焦ったのも、その数秒だけだった。

……見れば、数機の並んでいたビットが二つに割れている。

一体何が起きたのか。しかし、その答えはすぐに分かった。

何故なら、ビットの向こう側に、頭部の角を光らせた響介が居て、わざわざ説明らしきことを呟いていたのが、センサーによって流されたから。

「シールドエネルギーを多少使ってしまうが……切れ味は一級品だぞ」

と。

「フフ……フフフ……」

同じように木っ端微塵にされるビットを見て、何故か、セシリアが不気味な笑みを浮かべた。

怪しく思ったのか。ビットを全機破壊し、セシリアへ奇襲をかけようとしていた響介は、わざわざ加速をやめ、静止した。

「……何が可笑しい？」

「いえ……なんでもありませんわ」

何でもないならいい。そう思った矢先のことだった。

再び加速を再開した響介だったのだが、セシリアのＩＳの、スカート状のものが外れ、こちらに向かってきたのだ。しかも、ミサイルのように爆発的な加速を見せている為、急停止しても直撃するコース。

「生憎、ビットはまだ残っていましたのよ？」
「クッ……」
二つのビットが、響介に直撃した。

ように、思われた。
「！？」
「残念だったな、それはすでに予想済みだ……」

そう、響介はこの二つのビットを上手く回避し、そのまま急停止、ホーミング機能をそなえており、再び襲ってくるビットを3連マシンキャノンで打ち落としたのだ。
しかも、その回避の方法がもの凄い。
響介はそこで、切り札であるはずの、『スクエア・クレイモア』を横を向き、一気に撃ち出したのだ。両肩に装備されたそれは、一発一発がチタン製の実弾であり、衝撃ももの凄い。
それを使うことで、反動を利用してビットを回避することに成功したのだ。
そして、響介は再び、セシリアをその目に捉え、ブースターを噴かせる。
遂に取った零距離。ここで響介は、右手をセシリアの腹部に突き刺す。すると、突然、その部分が大きな爆発を起こし、セシリアのシールドエネルギーを大きく削った。
『リボルビング・ステーク』。そう呼ばれる、パイルバンカーのようなものだ。
右手に付く針を相手に刺し、爆破する。そんな単純で原始的な武

装。

「終わりだ……！」

「……わたくしの、負け、ですのね……」

ステークの次弾が打ち出された時、セシリアのシールドエネルギーは尽きた。

「勝者、南部　響介」

## 第四話　決闘終了（後書き）

無理やりキョウスケ勝たせてみました。
アルトの武装等は、また後日、詳しく解説します。

次回、エクセレンＶＳ一夏＋α（入ったらですが）です。

## 第五話　騒動（前書き）

考えてみたら、一人称を使ったバトル描写って始めて書いた気がする。
思ったより難しいですね。

とまあ、そんなことよりも一つ報告をば。
実は私、学生なのですが……そろそろ学校のほうが冬休みに入るんです。
しかも、この冬休み、中々暇が少ないです。予定が滅茶苦茶入ってます。
なので、ちょっと冬休み中は更新が遅れることになりそうです。
まあでも、最低週１では書いていこうかなと。
後、プロット等の復興は終わりました。
以上、報告でした。

# 第五話　騒動

「お疲れ。後おめでとう、響介」
「ああ……だが、奴の油断が無ければ恐らく勝てなかった。流石は代表候補生といったところだな」
「じゃあこれから俺が戦うエクセレンも相当強いってことかよ……」

息を吸い、吐き、呼吸を整えて、気合を入れなおす。息を吸うと腹が凹み、息を吐くと腹が膨れる。
昔通ってた篠ノ之道場で習った呼吸法だ。普通に落ち着く。

「それじゃあ、行ってくる」
「ああ……勝ってこい！」

箒と軽い挨拶を交わす。
軽いガッツポーズを組んだ箒から感じる気合に、またまた気合が入ってしまう。やっぱり応援ってのは大切なんだな、うん。
そして俺は、先ほど響介とセシリアの対戦中に届いたオレの専用ＩＳ、白式に乗り込む。てかこれ、白式っていうか、銀式って感じの色してるよな……。

「悪いが時間がない。初期化と最適化は戦闘中に終わらせろ」

千冬姉から実に優しいお言葉をいただきました。
いや、簡単に言うけどさ、初期状態のＩＳで戦うって結構キツイぞ？

昨日復習したところだから分かるんだけど、これって本当に難しい。
何せ、自分に合わないＩＳで戦うんだからな。例えるなら……そうだな、ママチャリを三年間使用して慣れきった人がいきなりマウンテンバイクにのる感じだな。うん、意味わからん。

早速、ＩＳを使ってアリーナ上空へ飛んでみる。イメージし辛くてちょっとフラついてしまったが、なんとか既に浮いてるエクセレンと同じ高度まで移動した。
ちなみに、アリーナは大体野球グラウンドよりちょっと広いか狭いかくらいの大きさだ。但し、上は滅茶苦茶高い。
観客席の前や上空一定の高さのところには遮断シールドって呼ばれるシールドが張ってあって、攻撃が観客達に届いたりしないようになってる。実に素晴らしい。
後ちなみに、これは何処かのスイッチでレベルを設定できて、レベルを高くすれば高くするほど強い攻撃しても大丈夫になるらしい。

「んじゃま！　始めましょっか！」
「ああ」

エクセレンの言葉に軽く頷いて答え、早速突撃してみる。
先ほどの響介のアルトほどじゃないけど、これ結構加速力あるよな。凄い凄い。
どんどん速度をあげながら、白式についた武装を確認する。武器がないと戦えないもんな。……は？
（近接ブレードが一本のみってマジかよ……まあ、何もないよりはマシだなっ！）
瞬時にそのブレードを展開する。軽くそれを振ると、エクセレン

が全力で後退し始めた。あっちのＩＳも滅茶苦茶早いな……白いＩＳ。確か、ヴァイスリッターって言ったっけな。

「悪いわね、あんまり近接戦闘は得意じゃないの。でも、射撃はお任せよん！」

そういうと、後退しながらエクセレンは素早く武装を展開した。ちょっと大型のライフルみたいなものだ。

「オクスタン・ランチャーＢモード！　んふふ、何処を狙って欲しい？」

こんな時にも軽口を忘れないって凄いことだよな。どうでもいいけど。

エクセレンが軽くあのランチャーのスイッチを押すと、かなりの速度で実弾が飛び出してきた。しかし、動きは一直線なものなので、結構簡単に避ける。

そして再び剣を構えると、二弾目が飛んできた。当然避けたが……このままでは近づけないな。

どうやったら近づいて一発切り込めるか。それを脳内で考える。思い出せ、今まで復習してきたことを、剣道で学んだことを……。

そうして思い出す、一つの策。実際これは相当危ないことなのだが……この剣が一撃必殺の威力ならば、ほぼ確実に勝てると思う。

でも、失敗すれば負けどころじゃなく、怪我だって当たり前の策かもしれない。響介じゃないけど、分の悪い賭けってところだ。

ところで、今思ったけど、響介って賭け事好きだよな。まあそんなこと考えていられるほどエクセレンは弱くないから、すぐにそんな思考も止まるんだけど。

……よし、行こう。

「あらん？　どったの、坊や？」
「年は同じだろ！？」
やっぱりエクセレンには勝てる気がしないな。違う意味で。
剣を両手でしっかり持つ。そうして、一直線にエクセレンの方へ加速した。
「あら、これを見逃すお姉さんじゃないわよ？」
エクセレンが再度構えたランチャーを放つ。しかし、俺は避けずに突っ込んだ。
今までもの凄い加速で流れていた景色が、加速によって俺の体によってかかっていた重力が、あの実弾の衝撃と煙で吹っ飛んだ。

◆

「お、織斑君……大丈夫なんですかっ！？」
「落ち着け、山田先生」
時を同じくして、モニター室。ここでは、一夏の行動に、大なり小なり全員が驚愕していた。
それも当たり前だ。エクセレンのオクスタンランチャー・Bモードは、距離こそ稼げないが、その分威力は相当ある。それをわざと食らわずに突っ込むのは、無謀この上ない。
しかし、流石に第一回モンドグロッソ優勝者なのか。千冬はほとんど動じずに、山田を宥めていた。
その瞳は力強く、そして同時に、何かを感じ取っているようだった。

「織斑先生、どうかしましたか？」

その、何処か優しくなった雰囲気に、響介は問う。

「ふん……あいつは機体に救われた。それだけのことだ」

「そうですか……。ん？」

「どうした、南部……何？」

会話の途中。二人はあることに気づく。

その、驚愕したようで落ち着いた様に、山田はたちまち首を傾げる。そして、二人の目線の先……数あるモニターの中の一つ。そこを見ると、二人が驚愕した意味を理解したのか、声をあげる。

「織斑先生……これはっ！？」

「ああ……一応、政府へ連絡を入れねばな」

そして、山田は急いで政府へと連絡をとる。

響介と千冬の頬には、一滴の冷や汗が流れ出していた――――――

◆

「うおおおおおおっ！！」

俺はどうやら賭けに勝ったようだ。

俺の狙い。それは被弾覚悟で突っ込み、一撃入れること。

実弾こそ食らってしまったが、そのダメージは運よく、『最適化』

、つまり、一次移行が終わったことにより、帳消し。……なるほど、これで白式はようやく俺の専用機になったってことか。
銀色っぽかった装甲は綺麗な白になり、やや滑らかな形になっている。
しかし、ここで攻撃を止めてしまえば作戦が台無しだ。俺は思いっきり叫んで加速した。
すると、握っていた剣が二つに割れ、中からエネルギー刀のようなものが出てきた。白式には、こう記されている。
『ワンオフ・アビリティー、零落白夜（れいらくびゃくや）　発動』と。
よくは分からないが、多分威力は先ほどより上だろうそれを、しっかり握りなおす。

「――――――悪いわね、私、良い男には花を持たせる主義だけど、これでも代表候補生だから、これ以上のサービスはあげられないの」

この言葉の意味を、俺は一言言われただけじゃ分からなかった。
しかし、数秒後にその意味を痛いほど理解することになる。

「――――――痛ッ！？」

直後に、凄い衝撃が、俺の真横から襲ってきた。
急いで振り向くと、そちらからは大量のミサイルが俺を捉えていた。
『スプリットミサイル』。多弾頭の牽制用の武器だ。
しかし、いくら牽制用の武器といっても、これだけの数があると流石にシールドエネルギーも減ってくる。

「あらあら、余所見は駄目よん」

その言葉に、急いで再びエクセレンのほうへ振り向く。エクセレンはオクスタンランチャーを構えてこちらに狙いを定めていた。

「オクスタン・ランチャーEモード！　こっちはかなり飛ぶわよ？　逃げられるかしらん？」

「くっ！」

急いで後ろへ振り返って加速するが、オクスタンランチャーEモードという、ビーム兵器が襲ってくる。確かにこちらはBモードとは違うな。いくら逃げても飛んでくる。

アリーナの遮断シールドすれすれを、曲線を描きながら飛び続ける。すると、あちらの射撃が一旦止まって……今度は、正確に俺のほうを狙ってきた。安定の直撃コースで。

「知ってる？　EモードのEは、E気持ちのEなの」

「知るかぁぁぁぁぁぁ！！」

そうして、俺のシールドエネルギーは尽きてしまった。

◇

「よくやったな、一夏」

「負けちまったけどな……」

試合終了後。モニター室に居た響介に労いの言葉をかけられる。弱冠嫌味に聞こえなくもないが、そこはあえてスルー。

ふと、響介の奥に居る千冬姉を見る。珍しく冷や汗をかいているようで、それをちょいちょい拭いていた。

「千冬ね……じゃなかった。どうしたんですか？　織斑先生」
「お前か。……いや、なんでもない。響介、先ほど言ったこと、貴様ならやれるな？」
「勿論です。それに……久々にあいつらに会えるのも少々楽しみでもあるので。では」

声をかけたら半スルー。しかも、ちょっと話をして響介はスタコラサッサとモニター室を去ってしまった。
これは一体どうしたことか。後、どうでもよくはないが、先ほどまでこの部屋に居た山田先生もどこかに消えていた。

「織斑先生、本当に何があったんですか？」
「そうよ、織斑先生。響介にだけ教えるっていうのは、ちょっとずるいんじゃなぁい？」

気づいたら、エクセレンが俺の肩によりかかって、俺の言葉に賛同していた。いや、何故に気配を隠す？
まあそう聞いても、どうせ驚かせたかったとか、そこらへんだと思うけど。そんなことより、今は千冬姉だ。

「ブロウニングか……そうだな、お前にも行ってもらうか」
「どういうことです？」
「……学園の周辺で、エアロゲイターの偵察機が確認された」
「先生、それって……っ！？」
「エアロゲイター！？」

これは流石に驚いた。
エアロゲイターといえば、白騎士事件の一年後に確認された、地球外知的生命体のことである。

現在、ビアン・ゾルダーク博士率いる「ＤＣ」によって少しずつ駆除されているようなのだが……ついにこの学園にまで勢力を伸ばしてきたんだな。

「既にヒリュウとＡＴＸチームをここに収集し、駆除を行っている」
「ＡＴＸチーム……ブリット君達ね」
「今回はどうも数が多いようでな。響介は既に向かった。貴様も直ぐに準備して、増援に向かえ」
「大了解よん」

そこまで手短に説明されると、エクセレンは直ぐに走っていってしまった。
でもやっぱり、こういうのは人数が多いほうがいいよな。
しかも、エアロゲイターは最近世界の軍の一部を次々に攻撃してるっていうしな。頭数は多いほうがいいだろ。

「千冬姉！　頼む、俺もそっちを手伝わせてくれ！」
「何を言うか、馬鹿者が」
「え……？」
「これは模擬戦や決闘なんてレベルじゃない。実戦だ。軍隊まで来ているのだぞ、そこへ初心者のお前が行けばどうなる？　お前の命が危ないどころか、仲間達の邪魔にすらなるかもしれん」
「……」

千冬姉の言葉に、俺は反論できず、ただ黙って俯き、頷くことしか出来なかった。

## 第五話　騒動（後書き）

ちょっとキレが悪いかなって思ったり。
それにしても、ホントに一人称の戦闘描写になれないです。

## 第六話　ビアン・ゾルダーク（前書き）

すいません、ちょっとしたスランプに陥ってしまい、更新が遅れました。

特に最後のほう、手抜き＋スランプで凄いことになってます……

まあ、雰囲気出すために描写を少なくした、とでも思ってやってください orz

## 第六話　ビアン・ゾルダーク

ＩＳ学園外、校門の周辺。
およそ、航空機ほどの大きさの、虫型の機体と、一機の赤色のボディをした母艦、ＩＳに良く似たパワードスーツを着込む二人の男が対峙していた。
内、一人の男は、良く光る金色の髪を持っており、手に持った銃機のようなもので虫型の機体に応戦している。真剣な表情で虫型の機体を狙い打つが、その顔にはまだ若者特有の甘さが見えていた。
体には、ＩＳのような黒い装甲。しかし、それは、ＩＳよりも中々分厚く出来た装甲だった。
そして、その金髪の男よりもさらに先、ほとんど零距離で虫型の機体を、その手に持った大型の剣でバサバサと切り開いて行く男。
彼もまた、ＩＳに似つつもやや多い装甲に身を包み、胸部の装甲には星型のマークが刻まれていた。
髪は銀色に染まっており、男らしさ溢れるその顔つきに良くマッチしている。

「ゼンガー隊長！　援軍はまだ来ないんですか！？　あまりに敵機が多すぎます！」
「怯むな、ブリックリン！　敵など、いくらいようと立ちふさがるのならば切り開くのみッ！！」

金髪の男はブリットというらしい。ブリットが銀髪の男――――――隊長と言ってる辺り、上司であろう、ゼンガーというその者に愚痴を漏らす。
対し、ゼンガーは大声を張り上げて切り返す。ビクッと体を震わ

せるブリットに、赤い母艦――――――――ヒリュウ改より通信が入った。
ブリットの目の前に画面が表示される。相手は赤みがかかった髪を持つ女性――――――――ヒリュウ改艦長、レフィーナ・エンフィールドだ。

「諦めないでください！　逆に考えれば、ここに偵察機が集まってるということはチャンスなんですよ！　ここに目的のものがあるのか、それとも近くに母艦が居るのか、ここで見極めます！」
「賢明な判断です、艦長」

レフィーナの指示の後、もう一つ表示されるウィンドウ。そこに映るのは、白髪の老人。ヒリュウ改副長、ショーン・ウェブリーである。
直後、ヒリュウ改から一筋の光線が放たれる。それは、気を抜いたブリットに迫る虫型の機体を確実に貫き、消滅させた。
その突然の出来事に冷や汗を流すブリット。一気に血の気が引いていき、同時に、今度こそは不覚をとらないと心に誓った。
眼前で突進をしてくる虫型の機体を、その手に持つ、自身の身長よりも長い『零式斬艦刀』で切り開くゼンガーの後を追い、ブリットはスラスターを開放し、一気に加速する。そして、腰に持った『チャクラム・シューター』で確実に敵機を撃ち抜いていった。

◇

「チッ……確かに数が多いな……」

時を同じくして、ＩＳ学園校門周辺。アルトアイゼンを纏った響

介はブリット達の援軍に向かおうとしているが、それを阻むように虫型の機体が寄ってくる。
　響介はそれをなんとか破壊し続けてはいるが、これでは数が多すぎる。一機一機は響介にとって大した敵でもないのだが、これではいずれ弾が尽きてしまう。

（どうする……無視すればこいつらはＩＳ学園に侵入してしまうだろう。ならばここで全て破壊してしまうのが得策だが……弾の補充も出来んしな。……どうする）

　響介がそう考えた矢先。一筋の光線が虫型の機体を数機ほど貫き、破壊した。

「……エクセレンか」
「キョウちゃ～ん、助太刀に来たわよ～」

　後ろから軽口を叩きながら現れる女性、エクセレン・ブロウニング。先の射撃は、彼女のオクスタン・ランチャーＥモードによるものだ。

「すまんな、弾薬を節約できて助かった」
「あらあら、今日は素直ねえ」

　エクセレンは今の響介を素直というが、これは本当のことだ。
　すでに3連マシンキャノンは半分ほど使い果たし、シールドエネルギーも過度な突進や、シールドエネルギーを微弱消費するヒートホーンで減り続けている。
　決め手であるステークや、切り札であるクレイモアこそ使っていないが、これ以上戦いが長引けば使わざるを得なかっただろう。
　エクセレンが響介の隣に移動すると、勝ち目がないと判断したの

か、虫型の機体が引き上げていった。

「エクセレンお姉さまの前で背中を見せると、こうなるわよっ！」

エクセレンが再度オクスタン・ランチャーを構える。発射口から放たれた光線は幾つかの機体を破壊することに成功はしたが、残り数機は逃してしまった。

響介はその光景を見、ふと、センサーに視線を落とす。目的は主に、周囲の警戒と、ヒリュウ改の位置確認だ。

レーダーに映る大きな赤い点。これがヒリュウ改であろう。その周辺には、虫型の機体と思われる反応が大量に確認出来た。

……そして、そこからそう遠くない場所にもう二つ、大きな反応がある。それは、次々に虫型の機体と思われる反応を除去しているため、敵ではないと思われるが……。

（……嫌な予感がするな）

そう考えると、響介は、「エクセレン、行くぞ」と一言だけ声をかけ、ヒリュウ改の反応へと加速を始めた――――――――――――

◇

数分後。響介とエクセレンは、一通り虫型の機体を破壊し終えたヒリュウ隊、ＡＴＸチームと合流していた。

とはいえ、まだ気は抜けないので、ＩＳを装着した状態ではあるが、響介たちは軽く雑談をしていた。

「久しぶりだな、ブリット。ゼンガー少佐」

「お元気してた？」
「はい、お二人も元気そうで……」
「響介、ＩＳ学園では上手くやっているか？」
「……流石にあの状況下でのんびりも出来ませんが、よくしてもらっています」
「そうか」

そこまで軽く挨拶をすると、響介はふと、ブリットとゼンガーの体と、二人が纏う装甲を見た。形状はＩＳに似ているが、本質はまったく異なるそれを。

「……ゼンガー少佐。その装甲は？」
「あ、それそれ。私も気になってたのよねん。教えてくださる？」

響介の疑問に、エクセレンが乗っかる。仮にＩＳだとしたら、男性のＩＳ操縦者はこれで４人目。ＩＳじゃないとしても、これがＩＳに匹敵する能力を持っているのだとすれば、女尊男卑の世はくつがえされることになる。

この問いに、ゼンガーはゆっくりと話を始めた。

「そうか、お前達はまだ知らなかったな。これはお前達がＩＳ学園に行ってから数日後に開発された、パワードスーツ……ＰＴだ」
「ＰＴ？」
「ああ。パーソナル・トルーパー。略してＰＴ。高機動戦闘や空中戦が苦手な劣化ＩＳのようなものだな。燃費も悪いが、性別などは関係なく使える。
まあ、まだ開発されたばかりだから、俺が使う、この『グルンガスト零式』も、ブリックリンが使う『ヒュッケバイン』も試作機だがな」
「そうなんですよ。特に俺のヒュッケバインは、この前月で開発失

敗したものの改良版ですから、試作機のそのまた試作機……って感じですが」
「なるほどな。女性にしか使えない、ということから兵器にはなりきれなかったＩＳを兵器とした、一般には公開されないもの、か」
「概ね、そんなところだ」

ゼンガーが自身の纏うパワードスーツ、『ＰＴ』の大まかな説明を終える。すると、四人のハイパーセンサーに異変が起こった。
虫型の蒼い偵察機。コードネーム、バグズ。それが３機ほど再び迫ってきたのだ。

（解せんな。何故ここまで戦力差があるのにまだ偵察機を送り込む……まさか、ＰＴ、若しくは男性ＩＳ操縦者の、オレの視察と戦力確認が目的か？）

そこまで考えると、響介は一旦考えるのを止める。ここでいくら考えても仕方のないことだからだ。
敵が現れたのなら、再び打ち貫くのみ。響介が背後のスラスターを吹かせると……青紫の光線と、黒いビームが、バグズを貫いた。

「何……ッ！？」
「あらん？」

すでにバグズを撃退しようと武装を構えていたゼンガーとエクセレンも、それには驚愕する。そして、バグズを貫いた方向に視線をやり――――――二度驚愕することになる。

「あいつは……エルザム？」
「あらん、あそこに居るのって、ビアン博士じゃなぁい？」

青紫の光線を放った先に居るのは、真っ赤な装甲に身を包んで浮遊する、ＩＳを第二世代型に引き上げたビアン・ゾルダークその者。
その横から、ブリットの纏うヒュッケバインにそっくりの黒い装甲を纏い、黒いライフルを持つ金髪の男性。ゼンガーは、エルザムと言っていた。

「あれがヒリュウ改……そして、ＡＴＸチーム、か」
「始めまして、ヒリュウ改、そしてＡＴＸチームの諸君。私がＤＣ総帥、ビアン・ゾルダークだ」
「何……？　本物か？」

エルザム、ビアンが静かに言葉を発し、響介がその正体を疑う。
確かにビアン・ゾルダーク率いるＤＣ軍はエアロゲイターの討伐作戦を行っている。しかし、その活動を実行に移しているのは、トロイエ隊と呼ばれる、女性集団がＩＳを使って行っていること、と世間に知れているからだ。
しかも、連邦軍とＤＣはそこまで仲がよくはない。だから、連邦軍でもまだ開発されたばかりのＰＴをＤＣが持っているのは、明らかに不自然だ。
響介の疑問も当然である。
響介がビアンとエルザムの機体をねめまわしていると、当然ヒリュウから通信が入った。

「あの方は多分本物ですぞ。私は、今はハガネの艦長となっている水無瀬、大鉄艦長と共に、ヒリュウの進宙式に参加した時に、一度彼とは顔を合わせています」
「ヒリュウの副長、ショーン・ウェブリーか……久方ぶりだな」
ショーンとビアンが互いににらみ合う中、隣ではエクセレンがエルザムの正体を見破る手がかりとなりそうなものを発見する。

「ねえ、あのエルザムって人の装甲にあるあのマークって……もしかして、名門ブランシュタイン家のマークじゃない？」
「ブランシュタイン……コロニー総合軍の大将の名か」
「そうだ、二人共。あいつは、エルザム・Ｖ・ブランシュタイン……コロニー統合軍総司令・マイヤーの長男であり、教導隊出身のトップエースだ」
「教導隊って……昔のボスと同じ……！」

皆が驚くのも無理はない。コロニー軍、すなわち、宇宙で活動を行っている、者達の総大将、マイヤーの長男。要するに、エリート中のエリート、という訳である。

「お前達には伝えておいてやろう。我等ＤＣは、これより連邦軍に反乱する」
「何……？」
「この私が出向いたからには、最後のチャンスをやろう。どの道、連邦軍ではエアロゲイターを倒すことは出来ぬ……降伏か、死か。好きなほうを選べ。選択は二つに一つだ」

ゆっくりと、ビアンが告げる。

「さあ、選べ」

エルザムが、語りかける。

「エルザム、お前は……！？」

二人の言動に困惑するゼンガーを見、エルザムは再び語りかける。

「即答出来んか、ゼンガー。ならば、そこのパイロット……お前はどちらを選ぶ？」
「どちらでもない。俺は敵と戦うだけだ。負ければ、身も心も、撃たれてちらばるだけだ」

エルザムの問いに、淡々と答える響介。
その言葉を聞くなり、エルザムは口元をにやりと尖らせる。

「良い返答だ。ならば、己の運命は……己で切り開いてみよ。ビアン博士、命令を」
「いいだろう、これより、ヒリュウ改及びＡＴＸチームに、攻撃を開始する」
「どうあってもここで俺たちを潰す気らしいな……隊長！」
「心配するな、相手が誰であろうと、立ちふさがるなら切り捨てるのみだ！　ゼンガー・ゾンボルト！　いざ参るッ！」

## 第七話　VSディバインクルセイダーズ（前書き）

すいません、今回ちょっと短いです。
他の小説を執筆してたら、しゅ、集中力が……。

## 第七話　ＶＳディバインクルセイダーズ

「エルザム！」
「何を迷う、ゼンガー」
「何！？」
「お前はわかりやすい男だ。戦いにもお前の感情が見てとれる。……お前も感じているはずだ。このまま戦い続けても……我々人類は、彼等には勝てん」
「……！」

ゼンガーは自身の纏うＰＴ、グルンガスト零式のエンジンをふかせ、右手の斬艦刀をエルザムへと向けた。
対してエルザムは冷静にそれを避けて見せ、手に持っておいたランチャーでゼンガーの装甲を削っていく。
その連弾を食らい、まずいと思ったのか、ゼンガーは一時後退する。エルザムとおよそ２、３００ｍほど離れたのだが……エルザムの射撃は、その距離でも、正確に先ほどと同じ位置を狙ってきた。
しかし、ゼンガーも伊達にこれまでの戦いを勝ち抜いて生きてきたわけではない。そこまで距離がとれていれば、エルザムの攻撃を避けることくらいはしてみせた。
そのやり取りを何度か続けたゼンガーだったが……このままでは拉致があかないと判断したのか。再びエンジンをふかせ、エルザムに特攻する。
そして、加速しながらなめらかな曲線を描き、エルザムの弾を避け、ある程度近づいたところで、ゼンガーは攻撃を加えた。
「ブースト・ナックル！！」
そう叫ぶや否や、ゼンガーは右手を空に向かって打ち出す。する

と、腕部分を防護していた装甲がロケットによって飛び、エルザムへと向かっていった。
エルザムはそれを見ると、即座に向かってきた装甲をかわす。そして、懐から別の武装を取り出した。
先ほどまでエルザムが使っていた、チャクラムと呼ばれる武装をしまい、取り出した銃機を構える。フォトン・ライフルというらしいそれが銃口から発射されると、ゼンガーはそれを斬艦刀で弾き飛ばした。

すると、今度はゼンガーが、今度は自分のターンだというばかりに接近を試みた。胸部から発射される小型のミサイルにブーストナックルでたびたびエルザムの行動に規制をかけながら、だ。
まあその攻撃も虚しく一撃も当たりはしなかったのだが、ゼンガーは確実にエルザムとの距離をつめていた。
そして、互いの距離が後１００数メートルといったところまで距離をつめることに成功したゼンガーは体を引き、胸を張って叫んだ。

「ハイパー・ブラスター！！」

すると、ゼンガーの纏うＰＴの胸部装甲に刻まれている星型のマークが鈍く光り始める。
そして、そこから星型の光線を発射した。

「何……？」

その攻撃にエルザムは多少驚きつつも、冷静に回避行動をとる。
そして再び、その手に持った銃機を構えた。

◇

エルザムとゼンガーの対決と同時期、少し離れた場所では、ビアンと響介、エクセレンにブリットが対峙していた。
基本的にはエクセレンとブリットが射撃で牽制をしつつ、響介が右手のステークをねじ込むか、頭部のヒートホーンをくくりつける。
そのような戦い方を、当初は描いていたのだが――――――。
状況はまったく違った。

響介、エクセレン、ブリットの三人は、確実にビアンから距離をとり、回避行動を最優先にしながら射撃行動を行っていたのだ。それは何故か。と問われれば、時は数分前に遡る。

「さあ、響介！　今の内に決めちゃって！！」

ビアンが纏う、赤く、刺々しい装甲――――――――ヴァルシオンというらしいそれから、エクセレンが次々に撃つオクスタン・ランチャーにより、遂に隙を奪う。
当然、その隙を見逃す響介でもなく、とてつもない加速を終えて、ヴァルシオンの装甲に、右手の先端に付く針――――――――リボルビング・ステークを差し込もうとしたのだが……。

「……何故、届かない？」

響介がヴァルシオンに右手を突き出したところまでは良かった。
しかし、何故かその攻撃は、見えない何かによって阻まれたのだ。
見れば、そこだけ空間が歪んでいる。

「――――――――もしや、バリアの一種か？」

「そうだ。これこそ、歪曲フィールド、究極のバリア兵器といったところだ」

それを聞くなり、響介は速攻でステークの引き金を引く。
広大な大地に大きな炸裂音が響き、辺りは煙に覆われる。
そうしてステークを一撃打ち込むと、響介は直ちにヴァルシオンから離れていった。
すると、煙の中から一筋の青紫色をした光線が、響介目掛けて放たれた。なんとか回避こそしたものの……その攻撃を受けた大地は原型を抉り取られ、クレーターでも出来たかのようだった。
吹き飛んだ地面の欠片、土があたりに舞い散る。

「……あれはマズイな。食らったら一撃死の攻撃に、最強のバリアか」
「そうねえ。文字通り、命をかけた大決戦ってところかしら？」
「ふざけないでください、少尉」

響介の呟きにエクセレンが軽いノリで返し、ブリットが突っ込む。
まるで、ちょっとした漫才のようだ。
その様子を見、煙からほぼ無傷で姿を現したビアンは、僅かな怒りを感じた。

「……ふざけているのか？」
「あらあらキョウちゃん、敵さんがお怒りよ？　どうします？」
「とりあえずは遠距離で出方を見よう。クレイモアならあのバリアも突破出切るかもしれん……射撃は苦手だが、ごちゃごちゃ言っていられる状況でもないのでな」

こうして、現在のような戦い方に至るのだ。
しかし、この戦い方もそろそろ限界に近づいてきていた。響介の

3連マシンキャノンの弾薬はほぼ尽き、エクセレンのオクスタン・ランチャーEモードのエネルギーもそろそろ尽きる。ブリットのフォトンライフルも既に尽きた。

「こうなったら、やるしかあるまいッ」

そう小さく叫ぶと、響介は左手のマシンキャノンを撃ち出しながら一気に加速、ヴァルシオンとの距離を詰めた。

ビアンは、甘いとでもいうかの様に、懐から小型のブレードを取り出して応戦する。しかし、そのブレードは丁度いいタイミングで、エクセレンの射撃によって弾かれていた。

「ここだ……全弾、もっていけ……！！」

響介は頭部のヒートホーンにエネルギーを充填し、バリアの一部分を切る。そうして出来た小さな亀裂に右手の針を打ち込み――――ステークの、残る5発を全て打ち出した。

すると今度は右手を引き抜き、両肩についた大型のタンクを開放。セシリア戦でも見せた、あのクレイモアを打ち出す。

次々に炸裂するクレイモア。鳴り止まぬ轟音。その光景に視線を移し、ブリットは驚愕のあまり、両手をぶらんと下げていた。

（どうだ……！？）

反動で小さいやけどを左手に負った響介だったが、そのくらいでは怯むまいと後退し、煙の中でバリアくらいは焼けたであろうヴァルシオンを睨む。ハイパーセンサーは、ヴァルシオンの無事だけを示していて、後は衝撃で焼け焦がれて見えない。

エクセレンが固唾を飲む。流石に、この状況で緊張しないというのは、エクセレンにも無理な話だったのだろう。

そんな三人に、ヴァルシオンから、冷たく、背筋をさするような、声が響いた。

「まだ、青い……」

突如、放たれる青紫の光線、クロスマッシャー……それは、後ろで時折射撃攻撃をしていたヒリュウを、いとも簡単に崩し落とした。

「何っ――――――――――――――――――――！？」

「ヒ、ヒリュウ改が！」

「落と、された……？」

これには三人も、驚愕する他なかった。

煙の中より現れるヴァルシオン。多少装甲がやけてはいるものの、バリアは健在、そこまでダメージを与えたようには見えなかった。

「チッ、あれでも駄目か……」

響介が小さく呟く。

すると――――――――状況に、変化が訪れた。

「うぉおぉぉぉぉぉおおっ！！」

「何……？」

ヴァルシオンの背後から、自身の武装、雪片二型を構えた、一夏が、ヴァルシオンの腕部装甲を綺麗に切り抜いたのだ。

これは流石のビアンも驚いたようで、自分の切り落とされた左腕部装甲を見て、すぐに一夏から離れた。

「一夏……？」

「響介、やっぱり駄目だ。俺は、ただ見てるだけなんて、我慢出来ない」

恐らく、後で織斑先生の反省文でも書かされるのだろうな――――――――――――――――そう響介が考えると、一夏へと小さく微笑んで見せた。

「一夏、お前の武装――――――――零落白夜はシールドエネルギーを無視して相手にダメージを与えると聞いた。それならば、やつのバリアを破ることが出来る……やれるな？」

「ああ、勿論だ！　守られてるだけじゃ、男じゃねぇ！」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0934z/

---

ＩＳ　～インフィニットストラトス～　ORIGINAL GENERATION

2011年12月24日11時51分発行